

巻頭言

生活の達人

近藤 知子

帝京科学大学医学部作業療法学科

時より立ち寄るブログに、思想家であり武道家である内田樹氏のものがある。その内田氏が、だいぶ前に、次の内容のようなことを書いていた。「太刀の達人は、素人ならば一直線で下ろしてしまう一振りを、複数の分節に分けて振ることができる。分節化されているが故に、その分節のひとつひとつで、最適な方向性を探りながら、太刀を振り下ろすことができる。」

子供の頃通っていた習字教室で、一、川、大などという簡単な文字を何度も繰り返し書いた。そこで行っていた練習は、一見、一本の線に見える一筆が、複数の分節に分けられることを知り、それを意識化し、体得して行く事だったように思う。書道家は、1つの文字を美しく書くため、筆のスピード、力、リズムを微妙に変えて描き出す。画家は海の「青」に、様々な「青」を見だし、異なる絵の具をキャンバスにのせる。ピアニストは、鍵盤をたたく音がタッチにより微妙に変わることを知り、1つの音に丸みや激しさを込める。達人と呼ばれる人は、一見単純に見えるものを分節化して捉え、それぞれの分節をその場にあわせて微妙に調整し、最終的にはそれを1つのものとして収めることができる人なのかもしれない。

日々の生活は、切れ目なく流れるように進んで行く。そして私たちは通常、そこで行なう「食事」「仕事」「風呂」などの作業を意識して取り上げ、念入りにみつめることはほとんどない。その流れが滞ったとき、私たちはそこにある作業を振り返り、そこで生じた問題を解決するために工夫を凝らすかもしれない。しかし、自分の知恵と経験では解決できない問題に出会ったとき、人は生活そのものである生活作業が成り立たなくなってしまうと、立ち往生する。

作業療法は、切れ目なく流れる日々の生活、何気なく行なう生活作業を分節化し、洗練することで発展してきた治療法であるといえるかもしれない。創始の初期は、生活を「規則正しい日常習慣」、「得意な仕事」、「社交的な集い」など、一日を作業で分節化し、精神状態の改善や意欲の向上を目指した。医学モデルが力を増すようになった後は、「食事をする」「木工をする」などの作業を1つ1つの工程へと分節化し、それぞれの分節を心身機能の向上へと関連づけている。

作業科学は、「作業が健康に影響を与える」という作業療法の信念と、「科学的であること」への希求の中から生まれた学問である。そこでは、作業は社会学、人類学、生態学などといった視点から取り上げられ掘り下げられて行く。作業の志向や、作業に伴う感情を脳科学的に解明しようと試みる研究もある。作業科学で生まれた知識は、一見、ひとつの流れに見える生活が、実は、作業により立体的な層を成す複雑な構成物であることを知らせてくれる。作業科学の知識を持ったとき、人は、生活をより深く、より細かく分節化する方法を知るのであろう。この意味で、作業科学は、人が「自分自身の生活の達人であること」を可能にし、そして、作業療法士が「他者の生活を健康なものにする達人となること」を可能にする学問であるといえるかもしれない。